

石澤良昭著

〈新〉古代カンボジア史研究

杉山 正明

ささやかな前がき

見事な大著が出現した。日本人による空前の研究書である。本書は七百数十ページをこす巨冊。それだけでも壓倒される。長年にわたる成果であり、心よりの敬意と賛辭を奉呈したい。

著者の石澤良昭さんが率いる上智大學のアンコール遺跡國際調査團は、二十數年にわたってアンコール遺跡の保存・修復・調査研究活動を展開してきた。まずは、そのことだけでも脱帽せざるをえない。そのいっぽう、クメール人による遺跡保存官を養成するため、現地にアジア人材養成センターも建設した。これまた頭がさがる。本書はまさに、古代カンボジア調査の陣頭に立ちつづけた石澤さんと、それにかかわった数々の人々たちによる苦闘と努力、そして情熱の結晶であるというほかはない。いささか私事にわたることでもまことに恐縮ながら、評者はかなり以前にたまたま福岡市が主催する「福岡アジア文化賞」（対象はアジア諸地域）の選考委員として石澤さんとともに知り合い、篤實なお人柄

と名利をこえたすずやかな風姿にすっかり魅了された。こんな方がおられるのかと驚くいっぽう、怖るべき博學と飾らない率直なものに感嘆した。

それにしても、あらためて溜息が出るような、大變な情熱と苦難のうでの成果である。ときには、まさに地雷原というべきところに踏み込み、歩みゆくことも少なくなかったはずである。命がけの仕事、いや壯舉であったといふべきだろう。ひるがえって周知のように、かつてカンボジアはゆつたりとした王國であった。それがかのポルポト派をはじめ、それぞれの思惑をもつ周邊各國やパワー國家があいついで介入・抗争した。やむことのない紛争・對立・抗争・殺戮、そして怖るべきジェノサイドが繰り広げられ、カンボジアの大地はもろともまさにキリング・フィールドと化した。

かえりみて、そうしたもろもろの「傷」はあまりにも大きすぎ、しかるべきことばさえも見つからない。しかし、時すぎてようやく近年、カンボジアに穏やかな日々が訪れている。もともとカンボジアは、小國ながらも限りなく平たく美しい大地と、豊かでゆるやかな河川と湖に恵まれ、いたるところが淡水水魚の豊庫であった。そして、人々はまことにしなやかでやさしく柔かい心をもっている。まさに、水と縁が織りなす東南アジアの桃源郷といつていい趣きがある。

I

さて、本書はその冒頭、いくらかロマンティックとさえいえるような麗しい感懷から始まる。まずは、そのあたり筆者の文章をあ

えてそのまま紹介する。

アンコール・ワット（評者注：「大きなお寺」の意）は巨大な石造の大伽藍である。天空にそびえ立つその尖塔、急斜面の大階段、大回廊、本殿まで続く五四〇メートルの長い参道に、私たちはある種の畏怖に似た衝撃と感動を覚える。アンコール遺跡の崩壊した祠堂や大伽藍を見ていると、現在の私たちの時間の感覚では到底測りきれない、悠久の時間を感じる。私たちは崩れた石材の山や放置された廢墟を見る時、かの昔の時代という壓力を感じる。アンコール文明が終わり、數多くの寺院がその役目を終え、ただの「石ころ」となる時、その石材はどこから来たのか、いつの時代かなどという新たな疑問を呼び起こし、そこから「科學」がはじまる。滅び去った寺院からその魂が抜け出し、これは何であるかを探す新しい魂が吹き込まれ、それがアンコール王朝時代の人々が託した無言の使者となつて、私たちに問いかけてくるのである。

ひるがえつて、著者は一九三七年生まれ。東南アジア史、とくにカンボジア碑刻文によるアンコール王朝研究を専攻する。上智大學卒業後、鹿兒島大學教授などをへて、一九八二年に上智大學教授、二〇〇五年から二〇一一年まで上智大學長、現在は上智大學特別招聘教授、上智大學學術顧問、上智大學アジア人材養成研究センター教授、上智大學アンコール遺跡國際調査團團長、文化遺産國際協力コンソーシアム會長を歴任する。

一九八〇年に内戦中のカンボジアに入り、「S. O. S. アンコール遺跡」を全世界にむけて訴え、以後は一貫してカンボジア

とその文化遺産のために献身的な活動を展開しつづけた。そうした活動から二〇〇三年一〇月に國際基金賞、二〇〇七年一月にカンボジア王國シハモニ國王よりサハメトリ章、二〇一一年一月には日本國政府より瑞寶重光賞を授與される。なお、著書は『アンコール・王たちの物語』（NHK出版、二〇〇五年）など多數。

さて、本書全體の構成をひととおり略述すると、「はじめに——アンコール・ワット研究を通じて『人間』を考える」を劈頭に、第一部「古代カンボジア史研究の枠組み」・第二部「前アンコール時代——扶南とクメール眞臘をめぐる」・第三部「アンコール時代の政治と文化」からなる。さらに、全體を貫く章立てとして、第一章「カンボジア史を通観する——古代から現代まで」、第二章「碑刻史料にもとづくアンコール王朝史考察」、第三章「前アンコール時代を發掘する——問題點の整理から」、第四章「前アンコール史の展開」、第五章「前アンコール時代とはどんな社會か——碑文から読み解く」、第六章「冠稱者たちが活躍する前アンコール社會」、第七章「歴史空白とジャヤヴァルマン二世問題」、第八章「アンコール時代の宗教と政治」、第九章「アンコール時代の社會正義」、第十章「廢佛毀釋事件をめぐる一三世紀のアンコール王朝」、第十一章「アンコール王朝と同時代の東南アジア多文明世界」、「あとがき——新『古代カンボジア史研究』の刊行に際して」の各章が配される。ようするに、アンコール時代とその前後を中心として、ほぼ前近代を通観するわけである。

その一方、評者としての私は古代カンボジア史について、十

分な素養をもちあわせてはいない。というよりは、率直にいったほとんど素人に近い。あえていえば、せいぜいのところ第十章以下で扱われている十三世紀のアンコール王朝とその前後に關して、わずかにではあるがモンゴル時代史とその前後にかかわる文脈において、いくらか述べる場所があるにすぎない。本来であれば、カンボジア史の専門家による批評・總括こそが求められるべきところだろう。おそらくは、そうした講評がいずれなされるに相違ない。にもかかわらず、あえて蟻螂の斧めいた愚かな所業を試みようとするのは、不思議な縁に恵まれて、はるかに年長である著者との友誼を久しく賜ってきたからである。そしてさらに文字どおり、著者のほとんど身命を賭したともいえるような情熱とところざしに壓倒されつづけているからである。かくて、以下に綴るささやかな紹介という名の駄文は、ほとんどの的を射ることのないあざとい行爲にすぎないことを恥じるばかりである。

II

さて、石澤さん自身の筆になる別の文章も参照しつつ、アンコール遺跡群と数々の廢佛たちについての調査・研究のあらましを、評者なりにひととおり辿つてみたい。石澤さんひきいる上智大學のアンコール遺跡國際調査團は、一九九一年からアンコール遺跡に存する佛教寺院バンテアイ・クデイ遺跡をすでに觸れたクメール人遺跡保存官候補者たちの研修場所として設定し、ひろびろとしたエリア内で發掘・修復の研修を展開してきたが、二〇〇一年に二七四體にもほる廢佛を發見した。佛像は一・八メートルほどから二〇センチメートルくらいまで大小があり、青銅製の

小さな佛像も二つみつかり、さらに四面に數多くの坐佛が刻された千體佛の石柱も出土し、どうやら供養を目的とする佛塔だったかとされる。

ちなみに、さまざまな小佛や佛頭などもろもろは、およそ二・五メートルの深さ、一邊が約二メートルの四角形の底面に埋められていた。穴の外側には胴體部分などの大きな石片があり、全體として土砂をかけて突き固められ、丁寧に版築されていた。なお、こうしたさまざまな廢佛はいずれも頭部と胴體が切斷されており、そのうえで埋められていたのであった。およそ八〇〇年もの間、湿度・湿度ともに一定に保たれていたため、保存状態はきわめて良好で、高貴な尊顔を拜することができるという。

さて、こうしたさまざまな佛像がつけられたのは、十一世紀から十三世紀のことであった。それぞれの尊顔や身にまとう裝飾は、十一世紀におけるバプーン様式、もしくはアンコール・ワット様式を含みつつも、ほとんどは十三世紀のバイヨン美術様式に屬するとされる。十二世紀はクメール國家にとつて、輝ける世紀であった。スールヤヴァルマン二世（在位一一一三〜一一五〇年ころ）は、東方のチャンパの都であるヴィジャヤを攻略し、かくて東はチャンパから西はミャンマーに至るまで廣大な領域を保持した。そのいっぽう、國內ではかのアンコール寺院のなかでも最も素晴らしいアンコール・ワットを三十餘年の歳月をかけて建設した。ちなみに、ここでは王自身がヴィシュヌ神の姿で神格化され、禮拜の対象となった。だが、強引な征服戦争と大伽藍の造營で無理が生じ、それに加えてなんと王自身が行方しれずとなった。かくて、反亂や王位の篡奪、さらにはチャンパ水軍の侵攻もこおむ

り、その擧句にいったんはアンコール都城が占領されるという事態となったのであった。

とはいうものの、そののち十二世紀末から十三世紀の第一四半期に至るころは、もつともかなめとなる時期で、名高いジャヤヴァルマン七世の治世に相當する。ジャヤヴァルマン七世は、バイヨンやタプロームといった数多くの寺院を築造し、アンコール王朝にとって空前の繁榮を出現せしめた偉大な王であったとされる。そして、およそ四十年にもわたる長い統治の間、一貫して佛敎振興策をとりつづけた。

ようするに、十二世紀前半までのアンコール王朝は、およそ四〇〇年にもわたる超長期の政權であり、その立國の思想はまさにヒンドゥー敎のシヴァ派とヴィシヌ派であった。その結果、都城やその内側、あるいはその近隣一帯を含めて、ヒンドゥー敎系の寺院が林立することとなった。そうした状況が久しくつづいたのち、それまではヒンドゥー敎系でおおわれていたアンコール都城において、佛敎寺院が建設され、かつは佛敎の聖地として大きく衣替えしたことは時代を劃するものであった。それこそは、ジャヤヴァルマン七世が大膽にも強權を發動して一氣呵成に押しすすめた「宗教改革」であったとされる。ただし、そうでありながらもジャヤヴァルマン七世は、片方ではこれまでの慣行もそれなりに尊重し、ヒンドゥー敎のシヴァ派やヴィシヌ派をもある程度は佛敎寺院内に取り込んで、結果としては混淆させていったと考えられる。

さて、アンコール遺跡國際調査團が發掘した二七四體の佛像は、ほとんどが「ナーガ」（蛇の神）に護られて禪定する佛陀であつ

た。三重に巻かれたナーガの胴體のうえに、どつかりと腰をおろして鎮座した典型的な佛像の背後には、ナーガが七つの頭を大きくもたげて佛陀を守るかたちとられ、それはこの當時ひろく流行していたものであった。ちなみに、そのころの佛敎教理（もしくは理想）といえば、生きとし生けるものたちが、はかなくむなししいものである「五欲」を克服してゆくことであった。「ボディ」、すなわち菩提ぼだい、もしくは道があり、人たるものは「正覺しょうかく」を得て「滅ぶことなき王權」を掲げつつ「解脱げだつ」、すなわち究極の勝利へとむかい、遂には永遠の安らぎの境地へと達する。それこそが修業に對する「涅槃ねはん」、つまり勝利だとされたのであった。

III

では、にもかかわらず数々の佛像は、どうして廢棄（廢佛）されたのだろうか。その第一の理由は、肝心のジャヤヴァルマン七世が他界したことであった。逝去は一二二〇年ころだとされる。偉大な存在であったジャヤヴァルマン七世がいなくなったことで、結局は王位の繼承をめぐる争いと宗教問題が捲きおこることになった。後繼者となったインドラヴァルマン二世（在位一二三〇ころから一二四三年）は、いくらかの史料や寺院の改造跡などから推察すると、佛敎および佛敎徒を認めていたとされる。しかし、それについて王位を手に入れることになったジャヤヴァルマン八世（在位一二四三年から一二九五年）は、五十年をこすまことに長い治世の間、ヒンドゥー敎を敬信していたとされ、王位繼承を含めた權力争いを契機に、佛敎徒は反王黨派とされて、まさに佛敎寺院で佛敎狩りがおこなわれるにいたった。その擧句、ついに

は廢佛に及ぶことになったと考えられる。

フランスのアンコール研究者は、アンコール王朝の衰へについて、ジャヤヴァルマン七世が長期に民衆を寺院建設に働かせたため、アユタヤ軍が侵攻してきたとき抵抗するだけの餘力がなかったとしてきた。ところが事態は異なり、このたび出土した大量の廢佛期にはむしろジャヤヴァルマン八世の命令がゆき及び、政治力が機能して國內の繁榮がつづいていた結果、全國レヴェルで大規模な破壊・改修が可能であったことが判明した。現實に、十三世紀末のカンボジアについて『明史』の眞臘傳では、「富貴眞臘」と海外商人たちからたたえられたという。

こうしたことは、アンコール都城をはじめとする美々しく莊嚴な寺院や要塞などの佇いを語り傳えたものであったとされる。とりわけ、一二九六年にカンボジアに赴いたモンゴル時代の中華人、周達觀が『眞臘風土記』のなかで様々に述べ傳えている。壯大な王宮、ゆつたりとした人々の生活など、カンボジアの繁榮ぶりはまことに印象的であったのである。インドシナ半島に大きく版圖をひろげたクメール國家の偲影は、今もタイやラオスなどの周邊地域にも、あれこれと歴史のなごりを廣くとどめている。

ひるがえって、長らくつづいた「カンボジア内戦」の傷跡もようやく癒え、平和の訪れとともに復興への足どりもすすんでいる。うるわしいカンボジアの風土と、やわらかくつづましかかな人々の生活ぶり、そしてアンコール・ワットに象徴されるさまざまな遺跡群を訪ねて、世界各地から多くの觀光客がやってきている。戦亂でいたんださまざまな遺跡も、修復・整備が着々となされている。その一方、かなり遠くのジャングルのなかにも、アンコー

ル・ワットに匹敵するほどの遺跡がひろく點在する。ただし、かつてはそうしたところでは、内戦期にはボルボト派の據點にもなり、さらにはまさに地雷原とされて長らく放棄されてきていた。しかし、それもおもね克服され、たとえば七世紀はじめの王都であったとされるサンボール・プレイクックでは、ほとんどがレンガ造りの素晴らしい都城であったよすがが時をこえて傳わつてくる。

また、コーケーは九二八年から十六年間にわたって都となった。三十五キロメートル四方に、驚くほど數多くの寺院が建設され、別格のアンコール都城はさておくとするれば、最大規模の威容といえる。なかでも、三十五メートルものピラミッド寺院であるブラサート・トムは、歴倒的な迫力で知られている。さらに、アンコールの東方、四十キロメートルに存するベンメリアは、アンコールと大ブリアカーンをむすぶ要衝の地にある。このほかにも數々の壯大な寺院が點在し、それらは「王道」でむすばれていたのであった。

こうしてみると、あらためて當時のクメール王國の盛時が偲ばれる。數々の壯大な遺蹟群とそれをつくりあげた人々の誓みは、今や近代戦争という愚かしい怨讐を遙かにこえて、ふたたびカンボジアの地から世界へと人類文化の素晴らしさを廣く傳えている。それは「ワン・アジア」にとどまらず、「ワン・ワールド」への道がそこに開かれている思いがする。

二〇一三年九月 東京 風響社
A 五判 七六八頁 一五〇〇圓十税